

レコード軽術

No.34 2004 秋

The History of Orchestra in Japan



オーケストラの軌跡
交響楽団のあるべき姿を過去の歴史をふりかえって考える

古田秀和



.....
バグダッドに《新世界》
.....

《星条旗》にのめりこむ

.....
冬の《逢いびき》
.....

あの日から世界は変わった！気候変動の原因はテロか？

冷えゆく世界で二人の愛の行く末は？



サダム・ビン・ムーア監督の音楽映画

冬の旅 / D911

近日公開

クライスラー

愛の喜び / 愛の悲しみ



噂の天才少女ついにCDデビュー

福原ユミ 1st アルバム近日発売

オーケストラの軌跡

古田秀和（談）

いま、日本にはいろいろなオーケストラがあります。多くは50年代に生まれたものなんです。N響の前身に新交響楽団というのがあったことは比較的知られているのですが、それが出来たのは26年。そのあと42年、というともう、戦争中ですね、日本交響楽団という名になり、いまのNHK交響楽団となったのが51年です。いろいろなオーケストラが誕生したのはそのあとからです。

N響は、こういったらなんです、国が持っている楽団みたいなものですが、ほかのオーケストラは自分で食べていかねばならない、そこ

この秋ほど我が国のオーケストラのあり方について考えさせられたときはなかったろう。編集部では、本誌春号で連載を担当されている古田秀和さんに今日に至る流れをお聞きすることにした。今後の文化活動におけるオーケストラのあり方を考える上で少しでも役立てば幸いである。

でスポンサーを募集したところ、いろいろな企業が名乗り出ました。阪神電鉄とか、中部日本鉄道、近畿日本鉄道、関西の私鉄が多かったです。小田急もありましたよ。今こういう名前を聞くと意外というか、違和感を感じられる方もいるでしょうが、当時もそうでした。

オーケストラは文化の担い手だ、あんな鉄道屋が出てくる場じゃない、とNPO（日本プロフェッショナルオーケストラ組織）からそんないい方をされました。これに対して、教養主義に固まって本当の音楽がわかってない、新しい風を入れなければ、と抵抗したのですが、結局

日本放送とか、東京放送（現TBS）など、放送局系がスポンサーに付いたわけです。まあ、今もそうかも知れませんが、当時お手本にしていたのが欧米の放送局付きのオーケストラ、たとえばNBC交響楽団とか、フランス国立放送管弦楽団などでしたから、これは自然な流れと
いっていいのかなあ、とぼくは思います。



N響を頂点にピラミッド型によい演奏者が集まり、お客もそちらへ流れる、これは良くないということ、いろいろ工夫をした時代もありました。音大の卒業生を指名するのを抽選にするとか、演奏曲目が合わないように、作品番号の偶数番を演奏するグループと奇数番を演奏するグループに分けたりしたこともあったのですよ、これは二リーグ制みたいなものですね。

そんなことを振り返りながら今を見ると、音楽愛好家の関心はウィーンフィルとかNYフィルだとか海外のメジャー・オーケストラに向かっていますね。国内で活躍していた優秀な人もそちらへ移って活躍している。このことは、ある面では寂しいなと思うこともありますが、国際的な表舞台で活躍する人を送り出せるのは国内で人材がどんどん育っているからです。国際化の時代、これでもいいのではないかと思っています。

新譜月評

交響曲

宇野咆吼

新譜月評 The Record Keijutsu 交響曲

■ドヴォルザーク…交響曲第九番《新世界》



ウラムズヘドデル指揮
バグダッド交響楽団

治安の問題を筆頭に、問題山積みのイラクだが、少しずつではあるが文化的活動の芽が出つつある。バグダッドの交響楽団も例外ではない。ようやく交響曲が演奏できるまでにメンバーが揃い、このディスクの発売にこぎ着けた。

イラク人によるイラクのオーケストラといえども、指揮者はアメリカ人。完全にアメリカが手を引いたわけではない。紆余曲折を伴いながらもこの状況は続くだろう。

新しい民主的な政治体制によるイラクこそ「新世界」である、という意味でこの曲が選ばれたのかも知れないが、クラシック音楽にある程度通じている人なら、これは見当違いも甚だしいと思うだろう。この交響曲は音楽学校の教師としてアメリカに赴任したドヴォルザークがホームシック状態になったときに作曲された。黒人霊歌から取られたといわれる旋律はあるものの、全曲を通じて望郷の想いが濃厚だ。

ウラムズヘドデルの指揮はこの曲の叙

情的な面を一切排除するかのようにつづくで進む。まるで西部開拓史を描くかのよう荒々しい。そもそも、ドヴォルザークはアメリカ人ではないし、アメリカにはボヘミア地方のような自然に包まれた民族文化の伝統もない。多くを期待する方が無理というべきかも知れない。

オーケストラの人たちは、こんな指揮者に見当違いの音楽を押しつけられて本当に可哀想だ。

〔録音評〕 バグダッド郊外のモスクでの録音。やや残響が長めながら、鮮明。ピアノシモになっても輝きを失わない。しかし、これだけ細部までとらえられていると、演奏雑音や建物の外からのノイズまで気になる。第二楽章の静かな所で銃声のような音が聞こえたのが惜しい。

新譜月評

管弦楽曲

藤田由々

新譜月評 The Record Keijutsu 管弦楽曲

■スーザ…行進曲集



小泉変一郎指揮永田町
管弦楽団

スーザ生誕一五〇年を記念したアルバムである。《士官候補生》、《ワシントン・ポスト》など、おなじみのマーチが大編成のバンドで演奏される。本格的な管弦楽曲と比べこれらの曲はフレーズは短いし、抑揚の変化もあるパターンに収まる点で小泉のキャラクタによくマッチしているといえよう。

とかく表面的で単調、深みがないとの批評がささやかれるこのごろ、本人にとって気晴らしにもなる演奏会だったのだろう、気迫満々だ。

ただ、気迫があればよい演奏になるというのは間違いだ。指揮者の意図をくみ取り確かなテクニクで表現する演奏者が必要だ。

しかし、中声部の人数の少なさが響きから暖かみを奪っている。楽団紹介の写真を見ても、ホルンやトロンボーンが担当するこの声部はひな壇から少し下がった、いわば中二階に位置しているが、ここには二人しかいない。集めようとしなかったのか、来なかったかどちらか知らないが、人事の問題といえよう。

ともあれ、指揮者の熱狂ぶりは十分に伝わってくる。《海を越える握手》、《忠誠》と徐々にテンポを高め、最後の《星条旗よ永遠なれ》で結ぶあたり、思い入れたっぷりだ。

ただ、指揮者一人がそこまで我が身を注ぎ込んでも芸術にならないものはない。最も重要なのは深い理念を伴った感性である。それがなければついていく人はなく、アンサンブルは破綻し、聴衆は離れていく。

『録音評』 郵便貯金ホールでのライブ録音。どうしてここが選ばれたのか不明だが、録音機材も古い。分離が悪く、楽器配置がころころ変わるように聞こえる。安定感が感じられない。

新譜月評

協奏曲

歌咲風邪彦

新譜月評 The Record Keijutsu 協奏曲

■ラフマニノフ…ピアノ協奏曲第二番



ペ・ミョンフン (p) チョ
ン・ヨンジュン指揮春
川管弦楽団

今や日本のどのピアニストも彼の人気にはかなわないだろう、話題のペ・ミョンフンの来日ライブが出た。オーケストラはチョン・ヨンジュン指揮する、これも韓国の春川管弦楽団。

CDのタイトルに「逢いびき」と付けられているが、年配者にはこれはちよつと引つ掛かるだろう。今更60年以上も前に製作された同名のイギリス映画（この協奏曲が効果的に使われていた）にあやかるところもあるまいにと思ってしまう。今の若い女性たちによってまた新たなイメージ作りが

なされていくのかもしれないが。

ピアノ・ソロはよく歌う。これでもか、これでもかと表現したくなるほど甘味な抑揚にしっかりとした響き。ラフマニノフを選んだのもうなずける。愛だの恋だのをうたい文句にして、結局は商売上手なだけだとねたむ向きも当然あるうかと思われるが、そこは素直に鑑賞したいものだ。

これに対してオーケストラはかなり物足りない。指揮のチョン・ヨンジュンの懸命な棒さばきにも反応が鈍い。弦管共に表現意欲に欠く。ソウルのオーケスト

ラに比べてやや技量が落ちることもあるが、それ以前の問題として、日本に来て演奏するということに問題があるのではなからうか。

いくら人気のピアニストといっても、それは日本での話。楽団員がどこまでその状況をつかんでいるか疑問である。彼らが誇るピアニストといえども、伴奏として連れ出されたのが日本とあっては、反日教育が身に付いた彼らにとつては今一歩踏み出せないところもあるのではなからうか。歴史と国家の問題を思わずに聴けないディスクである。

「録音評」 残響多め。耳あたりがよいと感じる人もいるだろうが、ピアノソロのタッチが不鮮明。人工的に付加されたエコーらしい。ポップス的な音作りは好みが分かれるだろう。

あなたもライブ録音のプロデューサ

新開発

会場騒音添加アダプタ



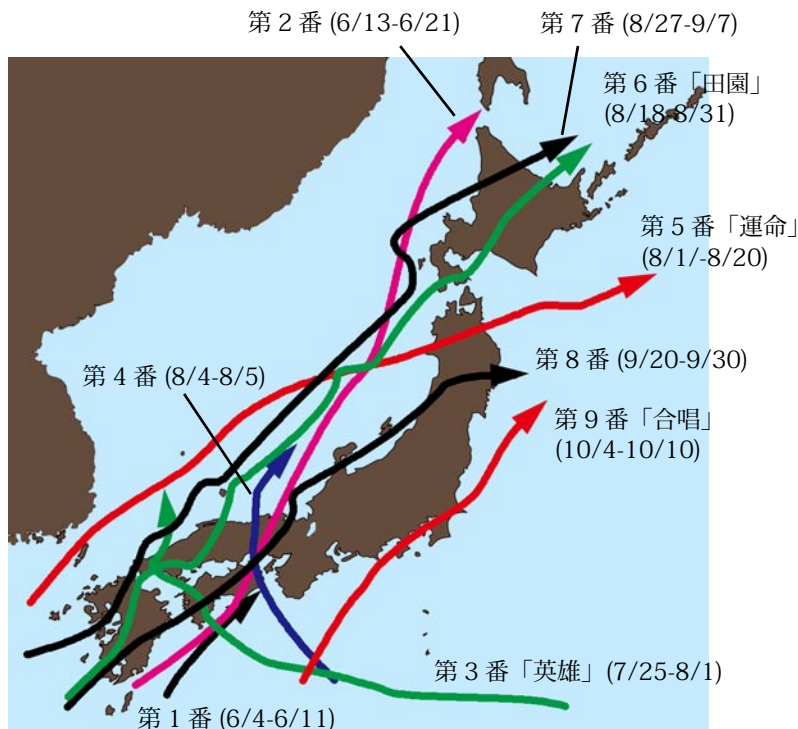
都会の有名ホール
はもちろん、草津音
楽祭、別府アルゲリッ
チ音楽祭など、温泉
地としても名高い地
域の個性ある響き入
りの巨匠の演奏が楽
しめます。

大手レコード会社
でも続々採用決定。

2004 年 日本列島縦断

ベートーヴェン・チクルス

全交響曲演奏ツアー 9 コース



各地でここ数年間で最も衝撃を与えた疾風・怒濤の演奏を残しました。

記念C D予約開始

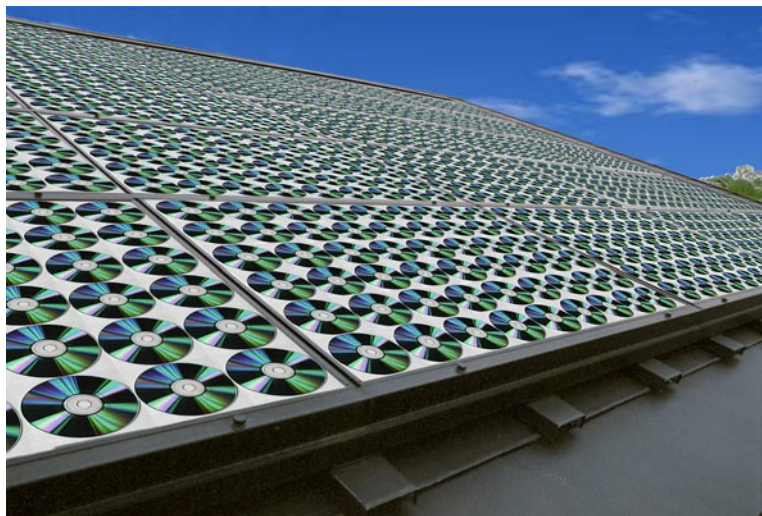
嵐の楽団

テンペスト・フィル

画期的ディスクの発明

C D - Rは直射日光にさらすと音が消えます。環境問題に早くから取り組んでいたオントモ燃処理では、音が消える際にC D - Rから電力が発生することを発見。

これをさらに効率アップし、屋根に並べれば一家の必要電力をまかなえるまでになりました。



聴かなくなったC D - Rで地球を救おう

C D引換券

オントモグループ

有効期限 2004.10.1

オントモ燃処理 (株)

編集後記

毎年秋号の方が内容が軽くなりがちなのですが、今回はいかかでしょうか。イラクへの自衛隊派遣の問題など、取り上げたもの以外に重いテーマはたくさんあるのですが、及ばず。むずかしいことです。

編集作業は今回からこれまでの PageMaker に代わって InDesign CS で行うことにしました（発行が遅れた原因のひとつでもあります）。

バックナンバーのハイライト、真面目なエッセイなどを <http://www3.ocv.ne.jp/~yanagawa> で見るができます。

レコード軽術 '04 年秋号（通巻第 34 号）

2004.10.18 第 1 刷発行

2004.10.20 第 2 刷発行

編集発行人 柳川誠介

〒195-0054 町田市三輪町 539-119

TEL&FAX (044) 989-8510

yanagawa@m2.ocv.ne.jp

PDF01426@nifty.ne.jp

印刷・製本 家内工業

hiroko-y@m2.ocv.ne.jp

